



Title	リグ・ヴェーダ「一切神讃歌」の神観念
Author(s)	藤井, 正人
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1982, 15, p. 49-64
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/4109">https://hdl.handle.net/11094/4109</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## リグ・ヴエーダ「一切神讃歌」の神觀念

藤 正 人

### —

リグ・ヴエーダの讃歌は、後のアヌクラマニー（「目録」）によつて、対象となつた神格に応じて種々の讃歌群に分けられている。その一つとして、「Visve Devāḥ<sup>(1)</sup>」に捧げられたもの（vaiśvadeva）」という名称のもとに分類された一連の讃歌が、ここで取り上げる「一切神讃歌」である。ただ、インドラ讃歌がインドラを歌つたものであるように、一切神讃歌が Visve Devāḥ（以下 VD と略す）を歌つたものであるとは必ずしも言えない。VD の言及が一切神讃歌に特に多いわけではなく、またそれの言及が全くない一切神讃歌が少くないからである。ヤースカはニルクタの中では、「多神格に捧げられたものは何であれ、それは『VD に捧げられたもの』の代わりに用いられる」と述べている。<sup>(2)</sup> またブリハッド・デーヴアターの作者は、「その中に多くの神格の結合が見られるマントラ（祭文）を、ヤースカとシャーンディリ亞の両学匠は、『VD に捧げられたもの』と言つ。行であれ、半詩節であれ、詩節であれ、讃歌であれ、多神格に捧げられたものはすべて、『VD に捧げられたもの』と言うことができる」と述べる。<sup>(3)</sup> アヌクラマニーの分類がこうした解釈を踏まえてなされたことを考えれば、「一切神讃歌」として分類された諸讃歌が、何よりも「多神格に捧げられたもの」として理解されていたことがわかる。

一切神讃歌は、多くの神々に対する呼びかけや祈願の集まりによつて構成された讃歌である。一詩節に一神格ずつを配する規則的なもの、一詩節の中に多数の神名をはめ込んだもの、さらには讃歌全体がほとんど神名の羅列からなつてゐるものまで様々あるが、この多くの神名を列挙する傾向は、一切神讃歌の主要な特徴となつてゐる。L・ルヌーは、この神名列挙の特徴から一切神讃歌の成立について、「一切神文学のこうした面はすべて、短い連禱、列挙のリスト——祭儀書中のそこここに保存されているニヴィツド（連禱句）に比べられる——から生じたものであり、それらの要素が時がたつにつれて、完全な讃歌を形成するよう増幅され、連接されたであろうと考えられる」と推測している。<sup>(4)</sup> 一切神讃歌が有名祭官族の家集に集中している事実も、その成立の基礎に連禱句の蓄積を考えることの説によつて説明される。

それでは、讃歌の材料として連禱句はどのように用いられたのか。次にあげる二つの例は、それについて一つの示唆を与える。

神々の幸多き好意は、行い正しき者たちに属する。神々の賜物は我らの方へ回り来たれ。我らは神々の友情を求め得た。神々は我らの寿命を延ばせ、「我らがより長く」生きるために。

我らは古来のニヴィツド（連禱句）によつて彼らを呼ぶ、バガ、ミトラ、アディティ、過つことなきダクシヤ、アリアマン、ヴァルナ、ソーマ、両アシュヴァインを。幸運をもたらすサラスヴァティーが我らに安樂を授けん」と。 (RV. 1. 89, 2-3)

この讃歌が歌ひ出される以前に、「バガ」に始まる神名の列挙が連禱句として存在しておたいれば、「古來の(púrvā)」という語によつて示されている。この連禱句が、前半の「神々 (deváh)」への祈願をうけて、各神格への呼びかけ

として用いられている。<sup>(5)</sup>

両アシュヴィンを「讚辞の」先頭に置け、恩恵「を得んが」ために。ブーシャンを先頭に「置け」。彼らは本來強力だから。敵意なきヴィシュヌ、ヴァーダ、リブクシャンが——、願わくは、われが神々をわが方へ向けんことを、好意「を得んが」ために。(RV. I. 186, 10)

この詩節は、ルヌーによつて一切神讚歌の成立に関する彼の説の証拠として、あげられたものの一つである。第三行の短い列挙が主格になつてゐるのに対して、それをうける最後の行の「神々」は目的格(*devān*)になつてゐる。ルヌーによれば、こうした破格の列挙は、文脈に合わしきれずに残つた古い連禱句の断片であるといふ。<sup>(6)</sup>こゝにおいても、先の例と同様、そうした古い連禱句は「神々」という語に対応するようにはめ込まれてゐる。このように「神々」という語の前後に神名列挙が現れる例は、一切神讚歌に多く見い出される。<sup>(7)</sup>したがつて、一切神讚歌の核になる部分は、連禱句の單なる集積によつてではなく、それらを「神々」という対応語を介して文脈内に取り込むことによつて成立したと言えよう。

神々は*devāḥ*以外に、「不死になるものたち (*amṛtaḥ*)」「祭るにふさわしきものたち (*yajatraḥ*)」「ヴァースたち (*vásavah*)」等の語によつても示される。以下の例では、これらの語はいずれも神名列挙に対応してゐる。バガの神、富の〔賦与者〕サヴィトリ、アンシャ、財宝を取得するヴリトラの〔殺害者〕インドラ、リブクシャン、ヴァージャ、およびプランディは、我らに恩恵を与えよ、力強き不死なるものたちは。(RV. 5. 42, 5)……トリタ、リブクシャン、サヴィトリ、駿馬を鼓舞するアパーイ・ナパートは、〔我らの〕詩想と〔祭儀の〕勤めに満足した。我は汝らのために、祭るにふさわしきものたちよ、これらの捧げられた〔ことば〕を望

む。……(RV. 2. 31, 6c - 7a)

「わ」、汝らの今の友情がないならば、我らは汝らの未来の〔友情〕によつて、一体何をなさん、ヴァスたちよ、昔の友情によつて何を〔なめべ〕。ムトラ・ヴァルナ、アディティ、インドラ・マルトたちよ、汝らは我らに安寧を授けたまえ。(RV. 2. 29, 3)

このように、「神々」は一切神讃歌の要となる語である。このことは、讃歌全体の構成の上で、冒頭や結末の詩節がしばしば「神々」への祈願にあてられてゐることからもうかがわれる。<sup>(8)</sup>これは、一切神讃歌のような、神々への祈願を内容の中心とする讃歌にあつては当然のことである。神々への祈願とは、Aの神格にaを祈願し、Bの神格にbを祈願することではなく、神々全体の人間にに対する恩恵を願つて、個々の神格が呼び求められることであるから。例えば、「インドラよ、……神々によつて定められた聖句を〔授けよ〕。祭られるべき神々の好意を〔授けよ〕」(5. 42, 4)の一節は、神々と個神との関係をよく示してゐる。また七・三五の讃歌では、各神格は sám (幸) という語によつて同じ祈願をうけ、最後の詩節で「神々」としてまとめられている。この神々全体の恩恵を求める人間の願いは、次のように歌われてゐる。

「のうちに、家畜に富む子孫のために、神々よ、死すべきもの（人間）は汝らを得んとする。神々よ、死すべものは汝らを得んとする。(RV. 5. 41, 17abc)

ここで、devá の複数形である deváḥ は、厳密には総称的な「神々」ではなく、複数性を表示しているにすぎない。その語自体には「神々」ほどの包括性はない。リブニ神のような少数の神をさす」ともあれば、神名列挙をまとめる時のように神々の全体を表す」ともある。この deváḥ の欠点を補うために、一切神讃歌では神々全体を表す

様々な工夫がなされてゐる。一切神讃歌にその名を与えたVD（「ヤギトの神々」）が第一にあげられるが、そのほかには、「各々の神（*devódeva*）」<sup>(9)</sup>、「神の一族（*daivyo jánāḥ*）」または「天の一族（*divyō jánāḥ*）」<sup>(10)</sup>、通常は「全アーリア人」を表すが、神々全体の意味に転用されてゐる「五種族（*páñca jánāḥ*）」<sup>(11)</sup>などがある。神々全体がいくつかの集団によつて表されることがある。なかでも、アーディティア・ルドラ・ヴァスの三神群による表現が特に注目される。例えば、

我ら人間は汝らのために、神々の招待の〔準備を〕しよう。我らの祭祀を正しく前方へ導け。アーディティアたち、ルドラたち、惜しみなく与えるヴァスたちよ、唱えられつつあるこれらの聖句を活氣づけよ。（RV.  
10. 66, 12)<sup>(12)</sup>

なにゆえ」これらの三神群が神々を包括するものとして選ばれたのか。G・デュメジルの「機能説から興味深い解釈」<sup>(13)</sup>はしばらくおくとしても、各神群をそれぞれ天・空・地の三界に対応させてゐる七・二・五・一四の例から、三神群による神々の包括が三界觀と関連してゐることがわかる。後に詳説するように、「天・空・地の神々」はVDの空間的な表現であるから、三神群をVDの下位区分と考えることもできる。また、「インドラがインドラに属するものたちとともに、マルトたちがマルト〔に属するもの〕たちとともに、アーディティア・アーディティアたちとともに、我らに庇護を与える」とを」（1. 107, 2cd）という奇妙な一節も、それに類似する一〇・六六・三を考慮すれば、この三神群を述べたものかもしれない。

さらに、「三十一」<sup>(15)</sup>という数によつて神々を総括する工夫もなされている。こうした箇所はリグ・ヴェーダ全体で十あるが、この内の三つは一切神讃歌に属してゐる。この「三十一」<sup>(15)</sup>という数は、個々の神格を数え上げたもの

ではなく——神々の個数は三十二よりもはるかに多い——神々のすべてを数によって尽くそうとしたものであろう。なお、「三十二」は後のブラーーフマナでは、ヴァース八神、ルドラ十一神、アーディティア十二神、その他の二神と説明されている。<sup>(16)</sup>にも先の三神群が現れていることは注目される。

いのうに、*devāḥ* を補完するために、一切神讃歌においては神々を包括する種々の表現がとらわれている。神名列挙と *devāḥ*、そしてこれらの包括表現によつて、一切神讃歌は祈願の対象が神々全体であることをより明瞭にしていくのである。ところで、一切神讃歌を理解する上で VD 等の重要性は、それらが多く文脈で示す全体性の特徴にある。その文脈を考察することによつて、一切神讃歌において祈願される神々が、いかなる視点からまとめられているかを知ることができるのである。

## 二

一切神讃歌は神々への祈願を内容の中心としていると述べたが、いのうでいう祈願は、リグ・ヴエーダの讃歌の内容についての、ブリハッド・デーヴアターの一一分法「讃美 (stuti)」と「祈願 (āśis)」<sup>(17)</sup>をうけたもので、神々の恩恵（すなわち願い事が神々の賜物として実現すること）を求める行為またはことばをさしている。いのうした神々への祈願は、当然予想されるように、祭祀の場で行われ、ある種の身体的な行事を伴つていた。次の二節はこの状況を伝えている。先行の詩節の VD や神名列挙をうけて、神々の先導者としてアグニに祈願して言う、

カンヴァ家の者たちは、恩恵を求めて汝（アグニ）に祈願する、祭儀の敷草を刈り、供物を持ち、〔祭儀の用具を〕整える彼らは。（RV. 1. 14, 5）

これに対し、祭祀の場で行われる祈願の行為は、祭祀以外のものから区別されている。六・五一の「一切神讚歌」は、次のような強い調子の一文から始まっている。

天にかけて、地にかけて、我はそれを認めない。祭祀にかけて、そしてこの「祭儀の」勤めにかけて、「それを認め」ない。搖ぎなき山々が彼を押しつぶやん」とを。極端な祭祀を行う者がうち捨てられんことを。<sup>(1)</sup>では、「祭祀 (yajñā)」と「祭儀の勤め (sámi)」が「極端な祭祀 (atiyājā)」と対立している。「極端な祭祀」の内容は明らかではないが、おそらく次の一節に語られる行為に関わっているのである。

神々の招待において、ラクシャス（魔物）たちに心を向ける者を、マルトたちよ、車輪なき〔汝らの馬車〕によつて轢きたおせ。〔祭儀を〕勤めた者の勤めを非難せんとする者が、空しき望みをいだかん」とを、〔たとえ彼自身〕汗をかいて〔励んだとしても〕。(RV. 5. 42, 10)

祈願が祭祀に含まれるか否かは、「神々の招待 (devavīti)」<sup>(18)</sup>にかかる点にかかる。この点を離れば（右の例では「ラクシャスたちに心を向ける」という）、それはすぐさま祭祀めいさいのものへと墮するのである。<sup>(19)</sup>

神々への祈願が祭祀の中に位置づけられていたことは、祈願の文脈の中に、祭祀の場を表す種々の表現が見い出される」とからもうかがわれる。その中で最も多く現れるのは、「ト」(ihá)と「ばく然とした語である。サヤナは注釈の中で、ほとんど常にこの語を「祭祀において (yajñe)」に置き換えてくる。また、単に「場 (sádana)」という語で示される」ともある。「父祖以来の場」(5. 47, 1) あるいは「天則の場」(7. 36, 1)とも書かれてゐる。<sup>(20)</sup> そのほか「祭儀の敷草 (barhíś)」、より明瞭な「祭祀の場 (vidátha)」、「祭壇 (védi)」等の語が見られる。といふで、祭祀に関連して特筆すべきは、VD のほとんどどの文脈は祭祀への何らか

の言及を含んでゐる。例へば、VD せみへの箇所で「祭るにまわるべく (yajatra)」や「祭られたるぐも (yajñiya)」という修飾語をうけ、*vīśve yajatrāḥ*, *vīśve yajñiyāḥ*, おもろ *vīśve yajatāḥ* へて代用表現する作つてゐる。<sup>(25)</sup> また「祭祀におこして祭られたるぐもたち」(7. 39, 4; 10. 93, 3) や、「祭られたるぐも神々の内で特に祭られるべきものたち」(7. 35, 15) と呼ばれてゐる。このほか「祭祀を希望す」(3. 20, 1; cf. 7. 39, 4)、「供儀を享受する」(1. 3, 9), 「祭祀を見通す」(10. 66, 1), 「祭祀を生み出す」(10. 66, 2) 等。いざ VD と祭祀との結び付きは、次の一節に明瞭に示されてゐる。

おかれた祭儀の敷草の上で、燃えたつ火のもとで、偉大な讚歌と挙祓によひて、私は〔汝らを〕得んと欲す  
ね。いの我らの祭祀の場にて、今日、祭るにふさわしき VD も、供物に喜び酔いたまえ。(RV. 6. 52, 17)  
祭祀は人間と神々の接点である。したがつて、VD が祭祀に關係していることは、それが祭祀を介して人間と結び付けてゐるといふべきである。いのりとは、VD に固有のヒュセントであら「人々（人間）にとって祭祀にふさわしいものたち (mānōr yajatrāḥ)」おもろ「人々による祭られたるぐもたち (mānōr yajñiyāḥ)」として示されてゐる。<sup>(26)</sup>

この祭祀との関係は、神々全体、特に VD を表す「[二]十一」の神々」にもそのおもとではある。後に取り上げる「[二]九・一」を除いて、やぐての用例から祭祀との関わりを示す文脈を注(12)の順に取り出すと、「赤い馬を持ち、歌を愛する〔アグニ〕も、彼ら[二]十二「〔の神々〕を運び来たら」(1. 45, 2), 「祭儀の敷草に坐つた[二]十一の神々」(8. 28, 1), 「[二]十一」も、人々による祭られたるぐも神々」(8. 30, 2), 「アグニも、妻を伴つた[二]十二の神々を運び来たら」(3. 6, 9), 「[二]倍の十一の神々と並んで、人々く蜜酒を飲むために来たら、

「画アシユヴァイヘヨ」(1. 34, 11)、「三倍の十一のVDエリ」にて、画アシユヴァイヘヨ、ソーマを飲め」(8. 35, 3)、「彼（アグニ）が三倍の十一の神々を以て祭らん」とも（8. 39, 9）、「三倍の十一の神々は汝らを仰ぎ見た。祭祀ど「ソーマの」圧搾に満足して、画アシユヴァイヘヨ、ソーマを飲め」(8. 57, 2)、「ソーマ・パヴァマーナよ、汝の秘密の場所に、三倍の十一のかのVDは「住する」(9. 92, 4)である。

一切神讃歌においては、VDと「三十三の神々」はともに、一つにまとめられた神々全体の呼び名である。それ故、それらが祭祀と結び付いてくるのは、祈願される神々の全体が祭祀と関連していることを示している。それでは、どのように祭祀と関連しているのか。このことは、神々の世界が一切神讃歌でいかに語られているかを検討することによって明らかとなる。

### III

リグ・ヴェーダの神界は、ニルクタやブリハッド・デーヴアターの中で、「天・空・地」の三界觀を基礎に整理統一されている。<sup>(23)</sup>しかしリグ・ヴェーダにおいては、個々の神格が三界に分類されているわけではなく、いくつかに分割された空間が神々の世界として想定されているだけである。空間の分割の仕方にも、「天・空・地」のほかに種々の類型が見い出される。「天・地」「天・地・水」あるいはそとにいくつかの要素が加わって世界全体を意味することもある。

これらの神界の諸領域は、単なる神々の活動の場所と考えられたのではなく、それ自身神格として祈願の対象となっている。例えば三・五四の讃歌では、終末部の神々への祈願が、天・空・地・水への呼びかけから始まつてい

る。さらに、次のような例もある。

よき導きをもつアーディティアたち、ルドラたち、ヴァスたちは、天地、大地、中空は、神々は連合して祭祀を支援せよ。祭儀のしるし（祭柱）を高く掲げよ。（RV. 3. 8, 8)<sup>(24)</sup>

第一行の三神群は、前述のように神々を包括する三つの集団である。これらの三神群と第二行の天・空・地によつて、神界の全体が表されている。第三行はこの神界全体をうけている。「連合して（saṃśasah<sup>(25)</sup>）」はVDの文脈に特徴的に現れる語であるから、第二行の「神々は連合して」はVDを暗示しているようである。そうであれば、この一節は、三神群・三界＝VDという図式を示すことになり、三神群が三界に関連し、VDの下位区分であるといふ先の推定の、今一つの根拠となる。

右の図式がVDから三界へという逆の方向へ展開したものに、VDの空間配分がある。それは、VDの全体性を示すエピセットの一つとして、これを「各領域にいるものたち」に弁別する一節である。一切神讃歌にはこうした箇所が八つある。まず「天・地・水」による配分は、一・一二九・一一、六・五一・一五、七・三五・一一、一〇・六五・九の四例にみられる。一〇・六三・二では「天」が「アディティ（無限）」という語で示されている。一方、「天・空・地」による配分は六・五一・一三でなされている。この箇所の「アグニを舌とするものたち（agnijihvāḥ）」は、「地にいるものたち」の代わりであろう。また、七・三五・一四と六・五〇・一の「牝牛から生まれたものたち（gojātash<sup>(26)</sup>）」が中空に関するものであれば、それぞれVDを「天・空・地」と「天・空・地・水」に分けてい る。

各領域に配分されたものたちの数は、次のように述べられている。

神々よ、天に十一ひて、地上に十一ひて、威力をもつて水中に十一住む神々よ、この供物を享受したまえ。  
(RV. 1. 139. 11)

三領域に十一神ずつを配するの」の一節は、「[1][十][1]」という数が神々を数え上げたものでないことを示すとともに、それが「天・地・水」ならし「天・空・地」の考え方に関連していることを知らせる。「[1][十][1]」は多く「三倍の十一」(tráya ekādaśásah)」と記されてゐるが、その場合の「[1]」はおもに神界の三領域を表してゐる。のうちに一切神讃歌においては、神界はVDとあることは同じことであるが、「三十二の神々」と深く関わつてゐる。これらすでに指摘したように、VDや「[1][十][1]の神々」は多く祭祀に関連して言及されている。とすれば、神界そのものも一切神讃歌では、人間の世界から隔絶した単なる神々の世界ではなく、祭祀との結び付きを持つ世界ではないだろうか。次の一節はそれを示唆している。

大河たちよ、三倍の三は詩人たち（神々）の共同の場であり、さうに三人の母を持つもの（アグニ）は祭祀の場における統王である。三は、天則を保持する若き妻、水の「女神」たちであり、日に三度、祭祀の場を支配する。(RV. 3. 56, 5)

「[1]倍の[1]」は、それぞれが三層に分かたれる神界の三領域を表してゐる。<sup>(26)</sup>「共同の場 (sadhástha)」は、satha = saha に基づく語で、「共に集まる場」を意味してゐる。[1]では、「天・空・地」が神々の集う場所として、第一二行以下の「祭祀の場」に対応するように語られてゐる。神界と祭祀との関連は、このほか「[1]つの祭祀の場 (tráni vidáthāni)」という語によつても示されてゐる。祭祀の行われる場所を一般的に表すvidáthaが、いくつかの箇所で神界の領域の意味に転用されてゐる。<sup>(27)</sup>これは、祭祀に集まる人間の状況を神々の世界に投影したものであろう。

といふで、「天・地・水」または「天・空・地」の内、大地はあくまで人間の世界であり、人間が祭祀を行う場所である。祭祀の始まりを告げる一文、「広大な大地は背をもつて拡がつた。〔大地の〕広き表面の上で、〔祭祀の〕火は燃え上がつた」(7. 36, 1)は、これを歌つている。三界を領する神々への呼びかけや祈願は、この地上の祭祀の場で行われる。

VD より、我のこの呼びかけを聞け、中空にいるものたちよ、天にいるものたちよ、アグニ（祭火）を舌とするものたちよ、あるいはまた、祭るにふさわしきものたちよ、この祭儀の敷草の上に座して、喜び酔いたまえ。(RV. 6. 52, 13)

それ故、神界は祭祀の場を包む世界だと言えよう。神々は、「[祭祀の]場の至る所から我らの呼びかけを聞け」(1. 122, 6)、「至る所から我らのもとへ来たれ」(1. 89, 1)と祈願されるのである。いのいとは、神々を各方位に配して神界全体を表現する八・二八・三にも認められる。守護者たち(*gopāḥ*)として祭祀を取り囲む神々は、最後の行で、VD を暗示する定型句「全一族を伴つて (*sárvayā viśā*)」をうけている。次に次の例では、祭祀の場が世界の中心であるといふ言明すらなされてくる。

私は汝に問う、大地の最果てを。私は問う、世界の臍(中心)のあるといふを。……大地の最果てはこの祭壇であり、<sup>(28)</sup>世界の臍はこの祭祀である。……(RV. 1. 164, 34–35 ab)

いのように、一切神讚歌の語る神界は、祈願の行われる場（祭祀の場）を中心とする「祭祀空間」とでも称し得る世界である。祈願の対象となつた神々は、こうした空間を占める存在として表象されたのである。いの祭祀を中心におき、空间的に把握された神々の集合体こそが、「天・空・地の神々」や「三十二の神々」と謂われる VD の内容で

ある。アーディティア・ルドラ・ヴァスの三神群も、おそらくは同じものを表している。

といろで、このように捉えられた神々は、もはや神話に語られる個性ある諸神格ではない。神名列挙に典型的に見られるように、神名のみによつて示される神々の集団の構成員であるにすぎない。三界配分の一例である一〇・六三・一<sup>(29)</sup>で、VDが「すべての名 (vīsvā nāmāni)」という語で表され、それが「拝すべきもの・称賛すべきもの・祭られるべきもの」と述べられていることは、これを示唆している。<sup>(29)</sup> 神々の個別性を捨象するこの傾向は、一層押し進められた形で次の詩節に現れている。

最初の曙光が輝いたその時に、偉大な」とばは牡牛の場で生まれた。神々の誓約を堅固にしつつ「<sup>(30)</sup> 我は宣言する」——神々のアスラの力（恐るべき神力）は偉大にして唯一のものである。（RV. 3. 55, 1）

最後の行は、当讃歌のモチーフとして全詩節で繰り返されている。個々の神格の特性を離れた、「神々」そのものの偉力 (asuratvá) を、唯一絶対なものとして讃えるこの一節は、一切神讃歌における神々の記述の頂点に立つものである。

#### 四

以上論じて来たように、神々の全体への呼びかけや祈願を主な内容とする一切神讃歌において、神々は、祭祀の場を中心とした空間を占める集団として捉えられている。一切神讃歌にその名を与えたVD（「すべての神々」）は、」のように空間的に把握された神々の全体である。神々の集まる空間が「天・空・地」等に分割されているので、VDは「天・空・地の神々」あるいは各界十一神ずつの「二十二の神々」とも言われている。

といろで、個々の神格の個別性を越えて、神々を統一体として捉える一切神讃歌の神観念は、神々を統べる一者

への思弁を開くべく、リグ・ヴェーダ第一〇巻のそれく通じてゐる所に思われる。事実、「唯一のもの」に対する幾分まとめた思弁が、すでに一切神讚歌三・五四・五一九に見出されるのである。また、最後に引用した詩節の「唯一のアスラの力」にも、一者に対する思弁の萌芽を認めることが出来る。一切神讚歌のリグ・ヴェーダにおける重要性は、かれこれの点にあると想ふ。

## 注

- (1) 「ヤグトの神々」の意味であるが、Rgveda (エーヴィー RV.) では術語的な価値を持つてゐるが、Brahmana 等では 1 の神群とみなされたところから、従来「一切神」等の固有名詞で置かれていた。
- (2) Nirukta 12, 40.
- (3) Brhaddevata 2, 132—133.
- (4) Louis RENOU, "Les hymnes aux Visve-Devah," *Commemoration Volume in Honour of J. Nobel* (New Delhi, 1959), pp. 177—178. Cf. also RENOU, *Études védiques et pāṇineennes*, IV (Paris, 1958), p. 5. 彼はや  
○諸女神、諸諸神の神々一致しない複数又複数構文による列挙の存在をあげてゐる。
- (5) Cf. Scheftelowitz, "Die Nividas und Praisās," *ZDMG* 73 (1919), p. 38. 彼はこの箇所の nivid が Nivid-adhyāya 中の VD < G nivid であることを指しているが、VD < G nivid の内容を検証すれば、それが一切神讚歌以前に存在したとは認められない。
- (6) RENOU, *EVP* IV, p. 5, n. 1.
- (7) 1. 14, 2—3; 90, 1—4; 106, 1—2; 107, 2—3; 122, 3; 2. 31, 1—2; 3. 56, 7—8; 4. 55, 1; 5. 42,  
16—17 etc.
- (8) 1. 89; 107; 139; 186; 3. 56; 4. 55; 6. 50; 52; 7. 35; 8. 27; 28; 30; 83; 10. 35; 63—66.

- (σ) 5. 42, 16; 43, 15.
- (10) 6. 49, 1; 52, 12; 10. 63, 17; 64, 17.
- (11) 6. 51, 11.
- (12) Also 2. 31, 1; 7. 35, 6; 14; 10. 66, 3.
- (13) Georges DUMÉZIL, "Mitra-Varuna, Indra, les Nāsatya comme patrons des trois fonctions cosmiques et sociales," *Studia Linguistica* 1 (1947), pp. 127-128. 彼のいうところでは、この三神は古代社会の三権・活力・生産の三機能を代表する神である。すなはち、神々の全體が機能上、表現されてゐる。
- (14) Cf. 10. 125, 1ab.
- (15) 〔十一〕神の幅及箇註
- 〔十一〕—— 1. 45, 2; 8. 28, 1; 30, 2. 〔十一〕<sup>ア</sup>裏たぢ—— 3. 6, 9.
- 〔十一〕<sup>ア</sup>十—— 1. 34, 11; 8. 35, 3; 39, 9; 57, 2; 9. 92, 4. 「天母<sup>ア</sup>十」—— 1. 139, 11.
- (16) Cf. DUMÉZIL, *L'héritage indo-européen à Rome* (Paris, 1949), p. 216.
- (17) Brhaddevatā 1, 7.
- (18) Cf. also 10. 35, 14; 66, 12.
- (19) 祈願の特徴として、神々の恩恵 (ávas)・好意 (sumati, sumná)・豔慾 (rati, rádhās) 等を表す言葉が繰り返ねば、神々と人間の関係が強調される点があつた。
- (20) Also 1. 122, 6; 8. 27, 5.
- (21) viśve yajatrāḥ: 1. 65, 1; 3. 57, 5; 6. 21, 11. viśve yajñiyāḥ: 4. 1, 20. viśve yajatāḥ: 2. 5, 8.
- (22) mānor yajñatrāḥ: 7. 35, 15; 10. 65, 14. mānor yajñiyāḥ: 8. 30, 2; 10. 36, 10.
- (23) Nirukta 振十聲、Brhaddevatā 振 1、1聲。
- (24) Anukramanī せりの讃詠やyūpastuti と似たやうな、古田詩録だけは vaisvadeva と記してある。
- (25) Cf. Maurice BLOOMFIELD, *Rig-Veda Repetitions* (Cambridge, Mass., 1916), p. 317.

- (26) Cf. Sāyana ad 3. 56, 5; Karl F. GELDNER, *Der Rig-Veda* (Cambridge, Mass., 1951) I, p. 403, n.
- (27) 6. 51, 2; 7. 66, 10; 8. 39, 9.
- (28) 「大地の終境は同じ拡がりを持つ」の意。
- (29) Cf. Jan GONDA, *Notes on Names and the Name of God in Ancient India* (Amsterdam, 1970), p. 8; 76.
- (30) 佐保田鶴治『ヘーメー正統派哲学思想の始源』(創文社、一九六二年)七八一～参照。なお、本稿を草すにあたって  
この書に教へられたといふが多くあつた。ここに感謝します。

(大学院学生)